



医療・介護

最前線

団塊世代が75歳以上になり医療・介護の提供が追いつかなくなる「2025年問題」について、中高生に考えてもらおう。4回の体験型連続講座が、横浜市内で実施され、記者も参加した。急速に進む超高齢化に、中高生たちは何を感じたのか？

超高齢化 生徒たち実感

2025年問題



2025年に向け何ができるか、について話し合った結果を発表する中高生たち＝横浜市南区のNPO教育支援協会横浜事務所

た。その後、聴診器で何度も、胸の音を確認した。約45分間の訪問診療を終えると、認知症の80代女性宅に向かった。

クリニックに戻ると、赤羽医師と生徒2人、スタッフで心理士の松原芽衣さん(32)が、訪問診療で感じたことを語り合った。「思った以上に、診療に時間をかけているのに驚いた」と中田さん。炭田君は「病院は管理されている感じだったが、在宅はそうじゃなかった」。赤羽医師は「在宅医療はオーダーメイド。専門ごとに分かれている

病院と違って、患者の求めに応じて専門外のこともやらないといけないんだよ」と応じた。

講座名は「医療現場で考える10年後の未来プロジェクト」で感じる医療の現場」。中学2年、高校2年の計17人が参加した。メイン講師は、横浜市立市民病院緩和ケア内科の横山太郎医師(34)が務めた。

今回の講座の特徴は、30代の医師や心理士らが中心になって、企画を練ったことだ。埼玉医大時代の同僚だった横山医師と松原さんは「将来の地域の担

い手である子どもたちに、2025年問題について考えてほしい」と、教育関係のNPOやソーシャルワーカーらと、講座内容を議論した。熱意に動かされたベテラン在宅医が、中高生の訪問同行を無償で受け入れた。

3月28日、3回の講座を終えた12人が集まり、グループごとに「2025年問題」今の私たちにできること」をテーマに話し合った。まず講座で感じた問題点や解決策を次々と付箋に書き出し、机の上の模造紙に貼っていた。「医師不足」「介護する家族が大変」「在宅医同士が情報交換し、行政に要望を」「傾聴ボランティアならできる」……。約1時間の議論を経て、各グループが発表した。

3月14日午後、横浜市神奈川区。西神奈川ヘルスケアクリニック院長の赤羽重樹医師(53)の訪問診療に、横浜英和女学院高2年の中田みすずさん(17)と聖光学院中3年の炭田英毅君(15)が同行した。

連続講座の3回目。中高生たちが実際の在宅医療の現場を見るのが目的だ。

1軒目は、神経難病で寝たきりの60代男性の自宅。赤羽医師は、介護する妻に、男性の体の状態を尋ねながら、腹のあたりをポンポンたたき、「おなかに空気がたまっているか、みているんだよ」と生徒たちに説明し

世代超え立ち向かう姿に希望

2025年問題の取材を続けていると、正直、気持ちが少し暗くなることもある。だが、今回は違った。講座に記者(48)も参加し、中高生の感覚の鋭さや深さに、刺激を受けた。訪問診療同行の際には「死んだら命は

どうなるのか」といった哲学的な話まで飛び出した。講座を企画・運営するスタッフも多くは30代。その熱意に共鳴したベテラン医師たち。世代を超え、2025年に立ち向かっていく姿に希望を感じた。

県内75歳以上149万人に

県の75歳以上の人口は、2010年に79万4千人だったが、25年には87%伸びて、約149万人になる見込み。病院のベッドは足りなくなり、自宅や介護施設での看取(みと)りを増やさないと、立ちゆかなくなる。

今回の講座は、文部科学省のキャリア教育事業の一つで、NPO法人「教育支援協会」(横浜市)が事務局を務め、NPO法人「放課後NPOアフタースクール」(東京)などが運営に協力した。初回は2025年問題についての解説、2回目は横浜市立市民病院緩和ケア病棟を見学した。講座の問い合わせは、横山医師(taroman045@gmail.com)。

記者のひと言

(佐藤陽)